

生駒山北部の古墳時代以降の花粉化石群集の特徴と植生変遷

○辻本 裕也・辻 康男（パリオ・サーヴェイ株式会社）

はじめに

生駒山地北部では、近年の第二京阪自動車道建設工事に伴う遺跡発掘調査により、山地斜面・扇状地の開析谷および沖積低地における花粉分析結果が多数蓄積されてきている（図1）。今回の発表では、各遺跡間の比較検討により明らかとなった古墳時代以降の花粉化石群集変遷について報告する。

1. 検討結果

各遺跡の古墳時代以降の花粉化石群集は、マツ属および草本花粉の増加が特徴であるが、考古相対年代に基づくマツ属の増加時期や増加パターンは、流域間で異なっていることが確認される（図2）。

マツ属を主とする花粉化石群集の変遷パターンは、マツ属が増加傾向を示す時期(zone I)、マツ属が急増・卓越するようになり温帯性針葉樹が減少する時期(zone II)、マツ属が卓越すると同時に木本・草本群集組成が単調になる時期(zone III) に区分できる。zone I からIIへの変遷時期は、12～13世紀頃に集中するが、zone II～IIIへの変遷時期は上私部遺跡などが位置する天の川流域で14世紀頃、生駒山地西麓の讃良川・岡部川流域で15世紀以降と時期差がある。また、マツ属花粉の相対的産出頻度は地域間で異なり、天の川流域の遺跡で各zoneで総じて高い傾向にある。

以上のこと、および各遺跡の地形発達過程や発掘調査成果を踏まえると、生駒山北部では、古墳時代以降になり、人為的植生攪乱により二次林としてマツ属が分布を上げたことが推定される。この傾向は、天の川流域で顕著であり、上私部遺跡では土砂流出量が増加し、耕作地が拡大する。12～13世紀頃になると、アカガシ亜属などの常緑広葉樹や温帯針葉樹が減少し、マツ属の卓越する林分へ変化するが、草本花粉の急増から林分自体の減少が推定される。本時期の天の川流域に位置する津田遺跡では、山地斜面の植生破壊と同調するように土砂流出量が増大する。12～13世紀以降は、生駒山地西麓の讃良川・岡部川流域では15～16世紀頃まで林分に大きな変化が認められず、二次林が維持される状況にあった。一方、天の川流域では植生破壊がさらに進行し、多くの遺跡において土砂流出量の増大が確認されており、近辺の山地斜面の荒廃が進行し、はげ山に変化する領域が拡大したことが推定される。

以上のこと、および各遺跡の地形発達過程や発掘調査成果を踏まえると、生駒山北部では、古墳時代以降になり、人為的植生攪乱により二次林としてマツ属が分布を上げたことが推定される。この傾向は、天の川流域で顕著であり、上私部遺跡では土砂流出量が増加し、耕作地が拡大する。12～13世紀頃になると、アカガシ亜属などの常緑広葉樹や温帯針葉樹が減少し、マツ属の卓越する林分へ変化するが、草本花粉の急増から林分自体の減少が推定される。本時期の天の川流域に位置する津田遺跡では、山地斜面の植生破壊と同調するように土砂流出量が増大する。12～13世紀以降は、生駒山地西麓の讃良川・岡部川流域では15～16世紀頃まで林分に大きな変化が認められず、二次林が維持される状況にあった。一方、天の川流域では植生破壊がさらに進行し、多くの遺跡において土砂流出量の増大が確認されており、近辺の山地斜面の荒廃が進行し、はげ山に変化する領域が拡大したことが推定される。

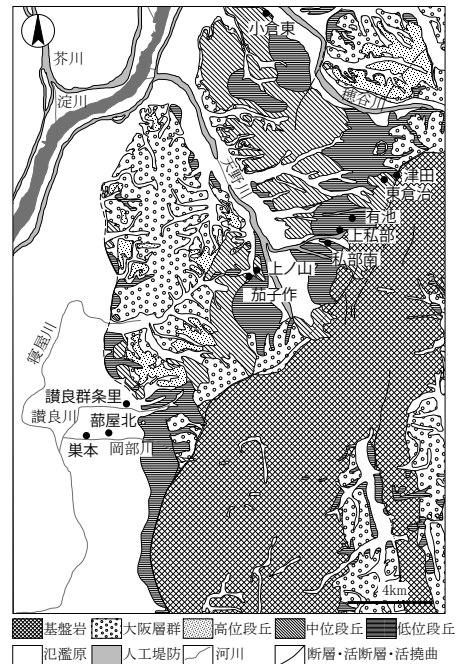


図1 遺跡の位置図(宮地・田結庄・寒川, 2001より作成)

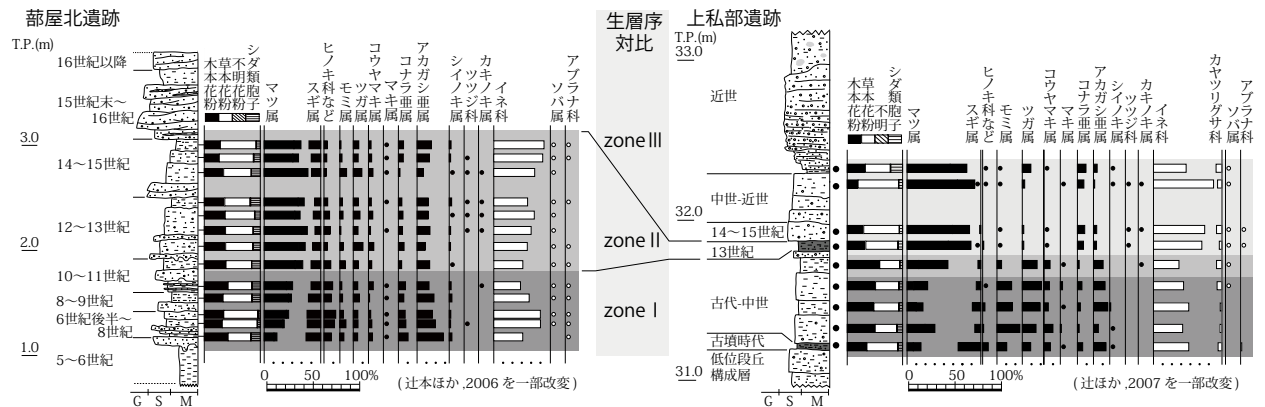


図2 部屋北遺跡・上私部遺跡の花粉化石群集生層序対比